

# 子どもが捉える夫婦間葛藤解決とその心理的影響： 抑うつと友人関係における主張性との関連

○本間音愛・井吉岡和子・吉儀瑠衣

(比治山大学大学院現代文化研究科) (福岡県立大学人間社会学部) (比治山大学現代文化学部)

## 問題と目的

家族は子どもにとって最初の所属集団であり、家族内での経験はその後のパーソナリティ形成に大きく影響する(後藤・水口, 2023)。なかでも夫婦関係は子どもの発達やメンタルヘル스에深く関与しており、従来は葛藤の在り方を中心に検討されてきた。しかし、夫婦間葛藤は避けがたく、その体験を問うことは抵抗を伴うため、より穏和な側面である葛藤の「解決」に注目する意義がある(高橋, 1998)。葛藤解決は子どもの不安低減や信頼感保持に寄与する(鈴山・徳田, 2009 など)、抑うつへの影響は十分に検討されていない。また、夫婦間葛藤解決が子どもの対人スキルにどのように反映されるか、とりわけ友人関係における主張性との関連については理論的示唆にとどまり、実証的検討は行われていない(柴橋, 2001)。

以上より本研究では、夫婦間葛藤解決が子どもの抑うつおよび友人関係における主張性に与える影響を明らかにすることを目的とする。

## 方法

**調査対象者** 大学生 123 名 (男性 29 名, 女性 94 名)。平均年齢は 20.40 歳 ( $SD=1.02$ )。

**調査内容** 1) フェイス項目: 学年, 年齢, 性別。2) 夫婦間葛藤解決: 高橋 (1998) の「子どもの評価による両親間の関係尺度」の葛藤解決尺度 8 項目と、山本・伊藤 (2012) の「子どもが認知した夫婦間葛藤尺度」の葛藤解決尺度 3 項目を合わせた 11 項目 4 件法。質問項目の主題は「両親」で統一した。3) 抑うつ: CES-D 日本版 (島他, 1985) 20 項目 4 件法。4) 主張性: 柴橋 (2001) の自己

表明尺度 26 項目と、他者の表明を望む気持ち尺度 18 項目、いずれも 4 件法。

## 結果と考察

各尺度の  $\alpha$  係数と相関係数を Table 1 に示した。本研究で構成した夫婦間葛藤解決尺度についても  $\alpha=.93$  と高い内的整合性が得られた。また、相関分析の結果、男女とも夫婦間葛藤解決と抑うつに有意な相関は認められなかったが、女性では葛藤解決と自己表明に有意な正の相関があり、自己表明と抑うつには負の相関が認められた。

次に、夫婦間葛藤解決が主張性を媒介し、抑うつに与える影響を検討するため、相関係数を基に因果モデルを作成し、性別による多母集団同時分析を行った (Figure 1)。モデル適合度は  $\chi^2 (2)=2.55, p=.28, CFI=.99, RMSEA=.07, GFI=.99, AGFI=.90$  で、おおむね良好な結果が示された。女性において葛藤解決から自己表明へ有意な正のパスが、自己表明から抑うつへ有意な負のパスが認められた。また、有意傾向ではあるが、男女ともに葛藤解決から他者の表明を望む気持ちへ正のパスが認められた。

以上より、夫婦間の建設的な葛藤解決は、子どもの自己表明を高め、抑うつを低減するとともに、友人からの率直な表明を望む態度を促す可能性が示された。女性でこの媒介経路が確認され、両親の建設的な葛藤解決が女性の自己表現を促し、心理的適応に寄与する可能性が示唆された。一方、男性では関連が限定的であったことから、今後はサンプルサイズに加え、性役割期待や文化的要因の影響も考慮して検討する必要があると考えられる。

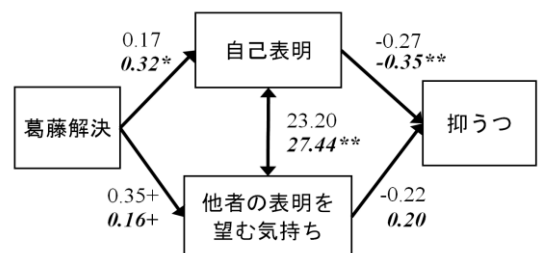
Table 1 各尺度の信頼性と相関分析結果(男女別)

	1	2	3	4
1 葛藤解決	—	-.28	.10	.34 <sup>+</sup>
2 抑うつ	-.15	—	-.33 <sup>+</sup>	-.22
3 自己表明	.26 <sup>*</sup>	-.29 <sup>**</sup>	—	.29
4 他者の表明を望む気持ち	.19 <sup>+</sup>	-.01	.41 <sup>**</sup>	—

注: 右上男性・ゴシック体, 左下女性・イタリック体

<sup>\*\*</sup> $p < .01$ , <sup>\*</sup> $p < .05$ , <sup>+</sup> $p < .10$

Figure 1 多母集団同時分析の結果



注: 上段男性・ゴシック体 下段女性・イタリック体

<sup>\*\*</sup> $p < .01$ , <sup>\*</sup> $p < .05$ , <sup>+</sup> $p < .10$